相模経済新聞
THE SAGAMI KEIZAI

NISSO
メディア
掲載情報

相模原の文化に貴重な1頁

昨秋、日相印刷（相模原市南区）が刊行した『仙客亭柏琳翻刻全集』（A4判35一頁）により、江戸末期相州磯部村（現・相模原市南区磯部）に生きた農民戯作者の作品の全容が明らかになった。市の文化的集積に貴重な1ページが加わったと言える。

（編集委員・戸塚忠良）

仙客亭柏琳の戯作（前）

柏琳については本名を荒井金次郎といい、1868（明治元）年に他界したということだけしか確実には伝わっていない。

江戸で天保3（1832）年から1年おきに出版された作品は『花吹雪縁柵』、『星下梅花咲』、『紫房紋の文箱』の3篇。合巻と呼ばれる絵入り物語だ。いずれも柏琳の稿本を当時の人気作家の柳亭種彦が校合している。

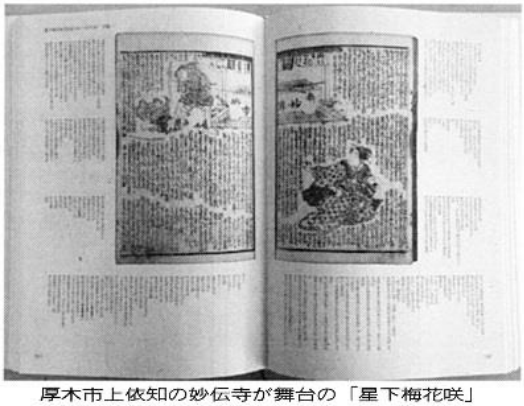
これまで木版原本の所在や作品の内容は一般に知られていなかった。現在は国立国会図書館など所蔵機関に依頼してネットで閲覧することはできるが、原文がくずし文字で書かれているため、一般の人が閲覧しても読み解くことは難しく、『幻の戯作』という状態が続いていた。

翻刻には原本の写真版、専門家がくずし文字を活字体に直した文章に加え、漢字仮名交じり文の冊子も添えている。著名な絵師による挿絵を観賞できるのも大きな魅力だ。

発刊から180年余りを経て発掘された郷土の文化遺産に親しみを深めてもらうため、3つの作品それぞれの骨子と成立の背景などを前・後編の2回で紹介する。

市内の図書館などに配架されている翻刻全集

上方で展開される「花吹雪縁柵」


厚木市上依知の妙伝寺が舞台の「星下梅花咲」

①花吹雪縁柵（はなふぶきえんのしがらみ）

物語は大阪・淀川の渡し船を皮切りに終始、上方を舞台に展開する。船頭の活躍と意外な行動、乗り合わせた侍の語る主君の仇と家宝の探索が話の発端で、以後のストーリーの底流となる。

さらにいくつもの場面転換が続き、浪人と大店の娘の年の離れた恋物語、夫婦のいさかいと親子愛、主家を追われた兄に対する妹の涙ながらの愁訴など情感あふれる場面が続き、遊郭の芸妓や侠客が彩りを添える。最後は登場人物が意外な正体を明かして大団円を迎える趣向だ。

当時のベストセラー作家柳亭種彦が作者名不詳のまま出版元にあっせんした経緯からすれば、出版時点で種彦と柏琳との間に面識が無かったことは明らかであり、同時に種彦が、出版すれば読者を獲得できるという評価を与えていたことも推測できる。

また、前篇下冊の表紙絵について、種彦は「為一翁（＝葛飾北斎）に表紙へ鮎の画をかいてもらったのは、かのいそべあたりの名産だからである」と二度目の口上を述べ、柏琳の作品への肩入れのほどを示している。

※原本は前篇が慶應義塾図書館蔵書、後篇が専修大学図書館蔵書。歌川国芳画。天保3（1832）年刊。

②星下梅花咲（ほしくだりうめのはなさき）

「妙傳寺利生物語」とうたっているように、磯部の対岸、厚木市上依知の妙伝寺が重要な舞台になっている。

物語は善悪入り乱れて争うストーリーで、偽手紙による強請、主人公の商家の跡取り綱五郎と芸妓の道行き、綱五郎の妹小糸と丁稚佐七の純愛、家宝の掛け軸をめぐる駆け引き、侠客の活躍などで構成され、信仰の力を示す挿話も欠いていない。

校閲した柳亭種彦は冒頭、「天保三年の春、花吹雪と題した絵双紙は、この仙客亭柏琳の作である。その頃は名を知らなかったので、相州磯部と地名を記しておいたが、その草紙が柏琳の眼にふれて、昨年名を知らせて来た。…自序があるので掲載し、私は花吹雪と同じ作者であるとだけ記して返く」と述べている。

その自序は「…私も相州の片田舎に住み、朝暮れ山野を歩き回っているが、四季の楽しみが無くはない。上依智の妙傳寺の尊い言い伝えを書き連ね、燈下に筆を噛みながら叙述している」という趣旨で、「相州高座郡磯部村　仙客亭柏琳」の署名がある。

曲亭馬琴の『近世物之本江戸作者部類』に、天保5年新刊の臭草子（＝草双紙）作者の一人として柏琳の名が挙げられている。

※原本は早稲田大学図書館蔵書。歌川貞秀画。

（つづく）

相模経済新聞

11月20号に掲載されました。

仙客亭柏琳（荒井金次郎）は、
日相印刷創業者（会長：荒井　徹、社長：荒井　功）の5代前の先祖となります。